

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 9 月 5 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25370206

研究課題名(和文) 中世仏教儀礼における音曲の復元的研究 読経と説経を軸として

研究課題名(英文) A reconstructive study of songs in medieval Buddhist ceremonies- Focus on chanting and preaching Lotus Sutra -

研究代表者

柴 佳世乃 (Shiba, Kayono)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号：60235562

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中世日本において行われた仏教儀礼について、音曲という観点から考究するものである。法会を音曲的観点から眺め、芸能復元に結実させるべく、三つの観点から研究を行った。(1)読経道の文化的位相の解明...読経道について、宗教文化ないし仏教儀礼においていかに位置付けられるのかを究明し、その音曲の特徴を読み解いた。(2)唱導の音曲の位相の解明...読経と深く関わる説経について、音曲的特徴や口伝の生成の過程を究明した。(3)音声による復元...澄憲作『如意輪講式』について、資料読解に基づいて演唱を実現させた。以上、読経・説経を軸に、仏教儀礼の歴史の中に位置付け、それらの音曲体系を考察した。

研究成果の概要(英文)： This research is to study the Buddhist ceremony in medieval Japan from the viewpoint of "voice performance" or "music". I looked at the Buddhist ceremony from a musical point of view, and researched from two major perspectives to restore the art form. I researched the elucidation of the position and its system of chanting and preaching Lotus Sutra in Buddhist ceremonies. And as an attempt to restore the concrete phase of such Buddhist ceremony to the present age, I did research investigations related to restoration of "Nyoirin-koshiki". I examined the chanting and preaching Lotus Sutra in the history of Buddhist ceremonies, especially I comprehended the musical system of preaching. In conjunction with the restoration of the actual situation of the past, reading comprehension of these primary materials realized the lecture ceremony.

研究分野：日本文学

キーワード：中世文学 仏教 説話 音楽 芸能 読経 儀礼 法会

## 1. 研究開始当初の背景

古代、中世を通じて多様に行われた法会は、院政期から鎌倉初期にかけてさらなる充実の時を迎え、質量共にすぐれた多くの法会が営まれた。ひとつには平安中期(一条天皇代あたりを中心とする)に、今ひとつには平安末期(後白河院代あたりを中心とする)に、それぞれ画期が認められ、鎌倉時代を通じて展開していく。安居院澄憲が活躍し、王権に重用されて説経の流を立てたのはこの平安末から鎌倉初めにかけての時期である。芸術的要素を多分に含み、音曲をも伴って唱導の家を形成したのであった。読経に関してもまた、仏教儀礼を通して、貴族社会に浸透し、高度に洗練されていった。特に宗派を超えて広汎に読まれた『法華経』は、音曲における秘説化を伴って、ほぼ同時期に芸道すなわち読経道としてかたちを整えた。こうした文化的動きについて、研究が進められつつある。

仏教儀礼に関しては、法会の次第や構成などについて、歴史学や仏教学、文学各方面から個別的に研究がなされてきた。本研究で取り上げる説経や読経に関しては、文学研究からの成果が多く積み上げられてきている。説経、すなわち唱導における文学的価値は早くに見出され、安居院流唱導の文章が研究の俎上に置かれると同時に、その文化史的意義が研究されてきた。この分野を牽引してきた小峯和明による『中世法会文芸論』(笠間書院、2009年)は、法会研究の現在を示し、そこで生み出される文芸の総体を捉えるべく様々な可能性を提示している。表現に軸足を置き、法会が行われる場を広く考究する方法は、これまでの文学研究のひとつの到達点と言えよう。ただし、法会の重要な側面を担う音曲に関しては、ほとんど体系的に捉えられることはなく、これまで考究されてこなかった。そのような中で、横道萬里雄『体現芸術として見た 寺事の構造』(岩波書店、2005年)は、仏事法会を、芸術・芸能という観点を含めて総合的に捉えることをうたい、分野横断的な視座を提供する研究として重要である。本書は、佐藤道子の『東大寺修二会の構成と所作』(平凡社、1975~82年)なども連動するものである。

読経に関しては、近年の研究の積み重ねにより、平安末から鎌倉にかけての能読の活躍と読経道の存在が明らかになっている。もともと字音学から研究がなされ、沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』(汲古書院、1997年)に読経道資料に関する基礎研究があり、文学研究からは、清水眞澄『音声表現思想史の基礎的研究』(三弥井書店、2007年)がある。

柴は、『読経道の研究』(風間書房、2004年)において、読経道の形成と展開に関する見取り図を提示し、その後、読経道の音曲に着目し、読経音曲がいかなるものだったかを追求している。説経の音曲に関しては、

冒頭に述べたようにほとんど手が付けられておらず、村上美登志『中世文学の諸相とその時代』(和泉書院、1996年)に安居院流読明の先駆的研究が為されたに留まっている。

## 2. 研究の目的

本研究は、中世日本において行われた仏教儀礼について、音曲という観点から考究する。古代から脈々と行われてきた仏教儀礼法会は、院政期から鎌倉初期にかけて芸能性をいっそう帯びるようになった。本研究では、法会を構成する読経と説経に特に注目して、これを音曲的側面から捉え直し、その芸態について、実証的方法に基づいて復元することを目指す。それらの音曲的要素が、いつから、どのように定まり、展開していったのかを明らかにする。説経を構成する経釈などの曲体、読経の要である読経音曲について、一次資料の解析に基づきつつ、音声による復元を試みる。宗教・ことば・音楽がいかに有機的に連動して法会を構成していたのかを、その歴史的展開をも含めて具体的に解明する試みである。読経・説経の実態を解明することを通して、中世の音声、宗教文化の特質について広汎な検討を加え、その包括的な姿を提示することが、研究全体の構想であり、目的である。

本研究では、それぞれの特徴と歴史的展開を、法会という場を念頭におきつつ、実証的方法に基づいて捉え直し、さらに周辺諸芸能(声明をはじめとする仏教音楽・雅楽・平曲など)といかに関わっているかを検証する。読経と説経とは、芸道として成る過程や時期が軌を一にしており、相互に関連が認められ、音曲という切り口で統合して研究することに大きな意義があると思われる。資料の解析に留まらず、現代に音声としての復元を試みることで、中世における法会の特色・ありようを立体的に捉える手がかりとする。

## 3. 研究の方法

研究目的を達するため、資料の調査と収集、およびその読解を研究の根幹に据える。各地の寺院・文庫等に蔵されている読経および説経に関する資料の収集・解析と、文学・歴史・宗教等文献の読み解きとを両輪のごとく働かせて、着実に成果をあげることを目指す。さらに、現行の法会を、現地に赴いて調査することにより、上記資料の読解と併せて、音曲の復元に結実させる。調査・分析にあたっては、研究協力者の近藤静乃氏らに、音楽・芸能研究の立場から加わってもらい、協同して進める。最終的には、それら成果を統合させて、音曲的側面から法会を捉え直し、中世仏教儀礼の音曲を、声明家の演唱によって実現させる。

具体的には、次のような3本の柱を立てる。  
(1) 読経音曲の解明 中世に『法華経』はいかに読誦されたか

(2) 仏事法会における説経の音曲の解明 読経と説経はいかに連動しているか

(3) 読経・説経の音曲の歴史的展開 どのような場でどのような人々によって行われたか

(1)については、読経の口伝書や譜を丹念に調査し、読み解くことによって、読経音曲を解明する。読経の口伝書の中に見える、芸能に関する記述を詳細に読み解くことに加え、複製残されている読経音曲の譜を集積し分析する。以下の(2)の作業と関わらせながら研究協力者とともに読経音曲の復元を進める。

(2)については、説経の口伝書類を調査し解読することによって、音曲の概要を明らかにし、説経が読経といかに相互に関わりを持つかを具体的に検証する。法会を構成する説経・読経は、政治文化の中核が深く関与し芸能化されており、声明などの他の仏教音楽や、周辺の芸能(和歌、連歌、平曲など)とも密接に関わっていることが予測される。音曲の骨格から細かな声の出し方の作法に至るまで、大小様々に及ぶ関わりの様相を明らかにする。(1)(2)を合わせ、音曲の復元をはかる。

(3)については、平安末～鎌倉期の都、南北朝～室町の書写山(播磨)、室町後期の南都(特に東大寺・薬師寺)という3つの重要な「場」が存すると考えている。それぞれの場がいかに関わり、音曲が展開するトポスとなっていたのかについて考究する。

以上の点を通じ、ことば・宗教・音楽の関係を探り、仏事法会における音曲の文化史的意義を明らかにする。

#### 4. 研究成果

本研究は、中世日本において行われた仏教儀礼について、音曲という観点から考究したものである。古代から続く仏教儀礼(法会)は、院政期から鎌倉初期にかけて芸能性をいっそう帯びるようになった。本研究では、法会を構成する読経と説経に特に注目しつつ、これを音曲的側面から捉え直し、その芸能性について、実証的方法に基づいて復元することを目指した。それらの音曲的要素が、いつから、どのように定まり、展開していったのかを明らかにし、説経を構成する経釈などの曲体、読経の要である読経音曲について、一次資料の解析に基づきつつ、音声による復元を試みた。

本研究によって明らかにしたことは、主として次の3点である。

(1) 読経/読経道の文化的位相の解明……法華経読誦が芸道化した読経道について、宗教文化ないし仏教儀礼においてどのように位置付けられるのかを究明した。さらに、その音曲の特徴を資料から読み解いた。

(2) 説経/囃導の音曲の位相の解明……読経と深く関わる説経について、その音曲的特徴や口伝の生成の過程を究明し、読経との関連を考察した。

(3) 音声による復元……説経の音曲復元の一步として、澄憲の手に成る『如意輪講式』について、資料読解に基づいて演唱を実現させた。声明家との協働作業によって、法会を催行し、その作業過程を併せて公にした。

いずれも、一次資料の調査と読解、法会調査に基づいて遂行されたものである。この3点について、以下に具体的に成果を報告する。

#### (1) 読経/読経道の文化的位相の解明

まず、読経については、以下の4つの観点から研究を行った。

##### 仏教儀礼における読経道の位置付け

読経の音声と身体性という切り口から論じたものが、「宗教的身体としての音声 経典読誦の声」"The Voice as Religious Body - Sounds of Reading and Chanting"である。ヨーロッパ日本研究協会(EAJS)の2014年国際研究集会(於スロベニア、リュブリャナ大学、2014年8月29日)にて、"The Sensorial Construction of the Body in Medieval Religion : Voice, Taste, Form, Performance"と題して5名の研究者でラウンドテーブルを組み、柴は読誦の音声がいかなるものとして中世の諸資料に描かれ位置付けられるかを明らかにした。

さらに、日本における『法華経』の読まれ方を多面的に捉えるシンポジウム「日本化する法華経」のパネラーとして、「法華経と読経道 芸道としての法華経読誦」の発表を行い(国際日本学シンポジウム「日本化する法華経」、於お茶の水女子大学、2015年7月5日)中世日本において独自に展開する法華経読誦の様相を明らかにした。その後、本発表は「法華経と読経道 芸道としての法華経読誦」(お茶の水女子大学『比較日本学教育研究センター研究年報』第12号、2016年3月)に要旨が載せられ、「法華経と読経道 芸道としての法華経読誦」(『アジア遊学』日本化する法華経、勉誠出版、2016年10月)として論文化した。

また、読経のみに留まらず、宗教文化における音声を広く考察するため、念仏についても論じた。良忍を中興の祖とする念仏や声明の動態を、読経道が成る前夜の動きと捉え、宗教文化の中に音声を重層的に論じた(「念仏と声明 良忍をめぐる 声」開宗九百年・大通上人三百回御遠忌奉修記念論文集『融通念佛宗における信仰と教義の邂逅』法蔵館、2015年5月)。

##### 読経道の音曲の特徴

これまで手つかずであった読経道の音曲の特徴について、『読経口伝明鏡集』の読解によりその輪郭を描いた(「平曲と読経道 書写山をめぐる」磯水絵編『論集 文学と音楽史 詩歌管弦の世界』和泉書院、

2013年6月)、中世において読経のメッカであった書写山圓教寺(兵庫県姫路市)のトポスとしての重要性に触れながら、後の平曲との関連を視野に入れつつ読経音曲を読み解いた。

### 読経の芸道化とその周辺について

読経道が成る過程で、どのような説話がどのように生まれ展開していったかを、読経道口伝書を中核に、他資料に拡げて論じた。成尋に関する説話伝承が、成尋伝記のみならず読経道にも見えることから、四天王寺などの場が介在していただろうことを明らかにした(「読経道の成尋阿闍梨説話 読誦と奇瑞」藤原良章編『中世人の軌跡を歩く』高志書院、2014年3月)。

また、鎌倉初期の持経者の実態を探るため、『尊師講式』を具に考究し、これが慶政(九条家の出自と思しく、鎌倉初期の宗教文化における重要人物)の述作であることを明らかにした(「慶政と延朗 『尊師講式』をめぐって」『国語と国文学』92巻5号、2015年5月)。慶政の事績においても新たな発見であり、読経道が成る時代の持経者像を浮かび上がらせることとなった。

### 読経道資料の翻刻紹介

修験道の六所家(東泉院)に伝わる『読経口伝明鏡集』を紹介した(「『読経口伝明鏡集』解題と影印」『六所家総合調査報告書 聖教』、富士市教育委員会、2015年3月)。読経の口伝書が修験道家に伝えられたことの意味は大きく、その点でも看過できない資料である。

## (2) 読経/唱導の音曲の位相の解明

読経については、唱導の音曲がどのように体系化され、伝承されていったのかを考察した。これまで個別に行われていた資料の読解を、読経・説経を両軸とした仏教儀礼における音声の芸道化の中に位置付けつつ行った。藝能史研究會のシンポジウム「記された音楽の世界 楽書、説話、唱導書から」(第39回東京例会、2015年12月6日)のパネラーとして、「唱導書に見る音楽・音曲」の発表を行い、「唱導書に見る音楽・音曲 能読と能説の交差・連動」(『藝能史研究』214号、東京例会特集号、2016年7月)としてまとめた。安居院唱導書を音曲の観点から読解し、読経音曲と比較検討して、その特徴を捉えた。説経においても、芸道化とともに体系化されたことを指摘し、その中心的人物として聖覚(澄憲の真弟であり、安居院流唱導の大成者)の重要性を論じた。

また、講式や法会の音曲的作法について記した『声塵要次第』の新出本(落合博志氏蔵)を翻刻紹介した(「『声塵要次第』翻刻」『宗教的身体テキスト資料集』E A J S発表資料冊子、2014年8月)。唱導の音曲を考える上で、要となる資料である。

## (3) 音声による復元

(1)(2)で重ねた研究成果とともに、本研究では音声による復元を目指したところがこれまでにない特徴である。研究の過程で、澄憲の手に成る『如意輪講式』を見出し、これを具に読解することを通じて、法会のかたちで演唱することを実現させた。

### 『如意輪講式』実唱への階段

研究協力者である声明家の海老原廣伸師・室生述成師、声明研究者の近藤静乃氏と協働して、本講式の譜付けを行った。柴が講式本文を読解、訓読し、その上で式文の内容に依じて節を付けていく作業を長期間かけて行った(譜本を作成した)。その作業内容と節付けこそが、中世の音曲を復元するポイントに他ならない。作業過程をも明らかにしつつ、法会に先立ち講演「澄憲作『如意輪講式』について」(中尊寺、岩手県平泉町、2016年6月26日)を行い、僧侶による法会が勤行された。当日の法会はマスメディアにも取り上げられ、反響を呼んだ。

さらに式文の全翻刻を「澄憲『如意輪講式』を読む 大覚寺蔵七段式の訓読」(『中尊寺仏教文化研究所論集』4号、2017年3月)として公にし、資料の全体像についても論究した。

### 『如意輪講式』の資料的価値について

上記復元作業と連動させ、澄憲が作成したことの意味と内容の解析を進めた。「澄憲と『如意輪講式』 その資料的価値への展望」(小峯和明論集『中世文学の展望を拓く』第五巻、笠間書院、近刊)において、表白を中心に、その文章構成や修辞の特徴を捉え論じた。また、読経のメッカ書写山圓教寺にも二本の本講式が蔵されていることを見出し、紹介した(「書写山圓教寺蔵『如意輪講式』解題と翻刻」千葉大学『人文研究』46号、2017年3月)。読経と説経をつなぐ資料としても、大変貴重なものである。

以上のように、宗教・ことば・音楽がいかに有機的に連動して法会を構成していたのかを、読経および説経を主軸に、その歴史的展開をも含めて具体的に解明しようと試みた。法会という場を念頭におきながら、実証的方法に基づいて捉え直し、さらに周辺諸芸能(声明をはじめとする仏教音楽・雅楽・平曲など)といかに関わっていたかを検証した。読経と説経とは相互に関連が認められ、音曲という切り口で統合して研究することに大きな意義があることが再確認された。資料の解析はもとより、現代に音声としての復元を試みることで、中世における法会の特色・ありようを立体的に捉える手がかりとした。今後は、より精緻に、また読経音曲をも含めた包括的復元を目指すことが可能となった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

柴佳世乃「『声塵要次第』翻刻」、『宗教的身体テクスト資料集』(E A J S 発表資料冊子) pp.21~30、2014年8月

柴佳世乃「『読経口伝明鏡集』 解題と影印」、『六所家総合調査報告書 聖教』、富士市教育委員会、2015年3月、pp.432~445

柴佳世乃「慶政と延朗 『尊師講式』をめぐって」、『国語と国文学』92巻5号、2015年5月、pp.77~88

柴佳世乃「法華経と読経道 芸道としての法華経読誦 (要旨)」、『お茶の水女子大学『比較日本学教育研究センター研究年報』第12号、2016年3月、p.16

<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/bitstream/10083/58697/1/p.16.pdf>

柴佳世乃「唱導書に見る音楽・音曲 能読と能説の交差・連動」、『藝能史研究』214号、東京例会特集号、2016年7月、pp.45~57

柴佳世乃「書写山圓教寺蔵『如意輪講式』解題と翻刻」、『千葉大学『人文研究』46号、2017年3月、pp.127~157

柴佳世乃「澄憲『如意輪講式』を読む 大覚寺蔵七段式の訓読」、『中尊寺仏教文化研究所論集』4号、2017年3月、pp.3~14

〔学会発表〕(計4件)

柴佳世乃「宗教的身体としての音声 経典読誦の声」(ヨーロッパ日本研究協会 EAJ S 2014年国際研究集会、ラウンドテーブル、於スロベニア、リュブリャナ大学、2014年8月29日): The Sensorial Construction of the Body in Medieval Religion: Voice, Taste, Form, Performance, Round table, The Voice as Religious Body - Sounds of Reading and Chanting, SHIBA Kayono

柴佳世乃「法華経と読経道 芸道としての法華経読誦」、『国際日本学シンポジウム「日本化する法華経」』、於 お茶の水女子大学、東京、2015年7月5日

柴佳世乃「唱導書に見る音楽・音曲」、『シンポジウム「記された音楽の世界 楽書、説話、唱導書から」』、藝能史研究会、第39回東京例会、於 二松學舎大学、東京、2015年12月6日

柴佳世乃「澄憲作『如意輪講式』について」(講演)、中尊寺、岩手県平泉町、2016年6月26日(日)

〔図書〕(計5件)

柴佳世乃「平曲と読経道 書写山をめぐって」(磯水絵編『論集 文学と音楽史 詩歌管弦の世界』(共著)、和泉書院、pp.341~346、2013年6月)

柴佳世乃「読経道の成尋阿闍梨説話 読

誦と奇瑞」(藤原良章編『中世人の軌跡を歩く』(共著)、高志書院、全394頁、pp.293~315、2014年3月)

柴佳世乃「念仏と声明 良忍をめぐる声」、『開宗九百年・大通上人三百回御遠忌奉修記念論文集『融通念佛宗における信仰と教義の邂逅』、法蔵館、2015年5月、全754頁、pp.173~192

柴佳世乃「法華経と読経道 芸道としての法華経読誦」、『アジア遊学』日本化する法華経』、勉誠出版、2016年10月、pp.112~127

柴佳世乃「澄憲と『如意輪講式』 その資料的価値への展望」、『小峯和明論集『中世文学の展望を拓く』第五巻、笠間書院、近刊

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

柴佳世乃 (SHIBA Kayono)

千葉大学・文学部・教授

研究者番号: 90343087

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

菅野扶美 (SUGANO Fumi)

共立女子短期大学・教授

近藤静乃 (KONDO Shizuno)

東京芸術大学・非常勤講師